

台日基層コミュニティ交流プロジェクト —関西ツアー実践報告—

青木利憲・張庭瑜・張仲霆

【要旨】

本稿は、2024年8月4日から8月7日まで、日本の関西で実施した「台日基層コミュニティ交流—関西ツアー—」の実施状況を中心に、台湾における地域まちづくりの事例と日本の関西学院大学が先行して行っている丹波市のまちづくり活動の交流を通して、台湾と日本における地域のまちづくりに関する活動を比較することでどのような協働活動による発見があるのか、その可能性について検討する。

本プロジェクト(「台日基層コミュニティ交流」)は東海大学日本語文化学系修士課程の実践プログラムの一つであり、113年度に学部の実践的交流活動である「関西ツアー」と連動することによって、2024年に関西地域の丹波市で本プロジェクトは実行された。

参加者は、本学の「台日基層コミュニティ交流」プロジェクトの指導教師である林珠雪副教授のほかに、今回調査を行う丹波柏原地区において長年プロジェクトを実行している関西学院大学建築学部の指揮を執っている角野幸博教授、清水陽子教授、東海大学中国文学系の主任高禎臨副教授、朝陽科技大学景観および都市デザイン学系の歐聖榮教授、連振佑副教授、丹波市柏原地域の地元住民や中高生の方々である。

今学期に実施する「台日基層コミュニティ交流」プロジェクトは、昨年行われた台日間の農業関連事業者の交流による「九州ツアー」とは異なり、今年は関西地域を中心に、まちづくりをテーマとした交流活動を展開するものである。特に、今回は台湾の東海大学と朝陽大学、そして日本の関西学院大学が協力し、地域のまちづくりについて共に考えることを目的としている。日本と台湾それぞれの事例を参考しながら、丹波市において三校による共同作業のフィールドワークを実施し、その成果として丹波地域へのまちづくり提案

を行うものである。

1. はじめに

本稿は2024年に実施された「台日基層コミュニティ交流—関西ツアー—」の実施状況を中心に、台湾と日本における地域のまちづくりにおける協働活動を通じて、より良いまちづくりの可能性を検討するものである。

台日基層コミュニティ交流は、東海大学日本語文化学系修士課程の必修授業の一つとして、2007年から15年以上にわたって続いている活動である。初期の段階では、日本の奈良女子大学との交流活動をもとに「奈良ツアー」を長らく実施してきており、東海大学日本語文化学系に関わらず、様々な学校とも連携を取りながらプロジェクトを行ってきた経緯がある。また、去年は活動の場を九州に移し、台湾と日本の農業事業者間での交流を行った。そして本年は、関西地域の丹波市柏原地区を中心に、地域のまちづくりに関する活動を展開している。また、今年の活動は、関西学院大学、東海大学、朝陽科技大学の学生が協力し合い、まちづくりの提案を行うことができるような協働の効果を生み出すことを試みるものである。

2. 2024 年台日基層コミュニティ交流プロジェクト:「関西ツアー」の企画と実施内容

2024年の「関西ツアー」は台日の学生が協力して取り組む「丹波市柏原地区のまちづくり」を中心に実施された。

【時期】

2024年8月4日～2024年8月7日

【参加者】

東海大学日本語文化学系の教師と学生、朝陽大学ランドスケープ&都市デザイン学系の教師と学生、関西学院大学建築学部の教師と学生、丹波市柏原地区における地域住民と中高生。

【実施内容】

関西学院大学が主導する丹波市柏原地区における地域のまちづくりプロジェクトに、東海大学と朝陽大学の学生が参画し、よりよいまちづくりのあり方について検討を行っている。

本プロジェクトでは、柏原地域でのフィールドワークや地元住民へのインタビューをもとに、三大学それぞれの混成チームが議論を重ねながら具体的な方法を模索する。

学生たちは、プロジェクトのテーマに応じて「観光班」、「交通班」、「交流班」、「定住班」の 4 つのグループに分かれ、それぞれの視点から現地調査や地域課題の分析に取り組み、柏原地区のまちづくりに対する提案を形成していく。

【見学場所】

- ・ 関西学院大学三田キャンパス、丹波市柏原地域

3. 「丹波市柏原地区のまちづくり」演習活動の進行状況

「丹波市柏原地区のまちづくり」演習活動においては、台湾からの参加学生が日本の学生と混成チームを組み、四つのテーマに基づいて「観光班」「交通班」「定住班」「交流班」に分かれて活動を行った。

以下は、そのうち台湾の学生が参加した「観光班」「定住班」「交流班」の進行状況について述べる。

3-1. 「観光班」の取り組み

2024 の丹波演習では、丹波市観光課が抱える課題に対応するため、丹波市内 6 地区の見どころを連携させた観光スポットを新たに開発し、特に外国人観光客に向けて紹介することで、観光手配をより円滑に行える仕組みづくりを目指した。

現地調査では、高速道路の休憩所「おばあちゃんの家」、恐竜博物館、地元商店街などを視察し、それらの地域資源を活用した観光ルートや体験コンテンツの可能性を探った。これらの調査結果をもとに、丹波市全体の観光の魅力向上と誘客促進に向けた提案を行った。

調査結果によると、丹波市内の 6 つの地区は広範囲にわたっており、各地へのアクセ

スも容易ではない。そのため、観光地を訪れる前に丹波市の魅力や特色をあらかじめ把握し、行きたい場所を計画的に選定できる仕組みが整っていれば、観光客にとっては時間の節約になるだけでなく、特に海外からの旅行者が自分の興味や関心に沿った旅に没頭しやすくなる。

【観光班の最終提案】

そこで本グループは、丹波駅前に観光ガイドステーションを設置することを提案する。このステーションは、高速道路の休憩施設「おばあちゃんの家」と機能的に類似しているが、それに加えて観光プランの立案支援機能や、地域住民が参画できるスペースを備えた、より多目的で利便性の高い拠点となることを目指している。

このグループの提案は丹波市の観光振興を目的とし、具体的には敷地の選定と建物機能の提案に取り組んだものである。しかしながら、最大の課題は、敷地選定に関する検討が不十分であった点にあった。

関西学院大学の先生からは、今回提案された敷地の近隣に、すでに類似の機能を有する施設が存在するとの指摘を受けたが、グループ内での事前調査が不十分であったため、それを把握できていなかった。この調査不足は、提案全体の説得力を損なう大きな要因となったと言える。

3-2. 「定住班」の取り組み

私たち定住班がまず取り組んだのは、丹波市柏原地区の現状を把握することであった。丹波市の「中山間地域」と呼ばれる地理的特性を持ち、関西圏にありながら、大阪までは車で約1時間半と比較的アクセスが良好である。地理的には北は日本海、南は瀬戸内海へとつながる中間地点に位置しており、都市と自然のバランスが取れる「ほどよい田舎」とも言える地域である。

地域の居住者構成としては、市内での勤務や転勤によって移り住んできた人々が多くを占めており、地域に根ざした暮らしと外部からの流入が共存する地域性が見られた。

このような地域の特性を私たちが把握できたのは、地元住民や高校生、さらには「まち

おこし協力隊」のスタッフなどへのインタビュー活動を通じて得られた情報によるところが大きく、非常に貴重な機会となった。

インタビュー活動に先立ち、関西学院大学による事前調査と地域住民との座談会が企画され、その中で、多くの中高生が親の転勤によって移住して来たこと、あるいは遠縁のつながりから仕事を求めてUターンしてきた事例など、様々な声を聞くことができた。

特に印象的だったのは、「まちおこし協力隊」として活動されている中川ミミさんからの聞き取りである。彼女は丹波市柏原地区への転入希望者の相談窓口を担っており、地域の定住に関する現状や課題について非常に詳しく、私たちの理解を深めるうえで大変有益な情報を提供してくださった。

そして、今回のインタビューを通じて得られた情報を討論の中で整理する中で、私たちは柏原地区において以下のような課題があることを明らかにした。現時点では多くの住民が転勤族などの一時的な居住者であるため、起業を希望する人や新たにこの地域に住みたいと考える人たちにとって、地域の魅力を知る機会が限られているという現状がある。加えて、そうした新たな住民を受入れる住宅が少ないことや、管理が行き届かず放置されている空き家の存在も深刻な課題として浮かび上がった。

これらの課題を踏まえ、私たちは台湾側と日本側の事例をもとに意見を交換し、「いかに横のつながりを生み出すか」という視点から解決策を模索した。たとえば、朝陽大学が以前以前行った「洄遊吧(fishbar)」という取り組みでは、地域の人々が食育を通じて花連地区の漁業文化に親しむことを目的とした施設の立ち上げた。この事例に倣い、丹波市においても、山間地域ならではの農業資源―栗、小豆、茄子、米などの特産品―を生かした地域ベースの創出が提案された。

このような提案の背景には、地域への定住を促進するためには新たな雇用を生み出す人材の存在が必要であり、その実現には人々の「横のつながり」を育む場の提供が不可欠であるという認識がある。また、そのような場所を空き家として使用して創出することで、空き家問題の解決にもつなげることができると考えられる。

議論の中で特に一致したのは、「人と人の結びつき」が地域づくり、特に定住の鍵であるという認識だった。台湾と日本の学生双方から、この点について多くの意見が出され、地

域への関与の重要性を改めて実感した。さらに、少子高齢化の問題や地域住民の参画といった社会的課題についても、両地域の共通点が見られ、今後の議論を深めていくことで、更なる発展が期待できると感じられた。

【定住班の最終提案】

わたしたち定住班は、これまでのフィールドワークとインタビューを通じて、丹波市柏原地区の現状や課題を把握した。台湾と日本の双方の学生による議論を経て、「横のつながり」というキーワードを導き出した。これは、地域内外の人々が持続的に関わり合うために不可欠な要素であり、私たちはその実現に向けて以下のような提案をまとめた。

まず、丹波市における定住・移住の現状については、生産年齢人口の減少により老年人口の急増しており、それに伴って管理の行き届かない空き家の増加が深刻な課題となっている。これらの空き家は潜在的な活用価値があるにも関わらず、即座に住居として提供できる状態ではなく、移住希望者のニーズに供給が追いついていない状況が生まれている。

加えて、地域住民や中高生へのインタビューからは、丹波市には転入者も多く、長期的な定住を促すためには「横のつながり」、つまり地域との交流を生む場の存在が不可欠であることが明らかになった。こうした発想の背景には、台湾・花蓮地区で行われている「洄遊吧(fishbar)」の取り組みがあり、そこでは地域住民が主体となって場を運営し、地域の漁業文化に触れる機会を創出している。

この実践例を参考しながら、私たちは丹波市柏原地区の特性を生かした以下の提案を行った。

1. 丹波の地元農産物を使用したカフェの創設と、起業支援を兼ねたサービスセンターの設置。
2. 地元住民と移住希望者との交流の場の設置。
3. ボランティアや自治体による移住者支援体制の構築。
4. 専門家や企業人材を一定期間地域に定住させ、地域住民に対して専門的な技術指導を行う。

5. 支援団体が活動できる共用スペースの提供。
6. 空き家を改修し、スタジオやオフィスのレンタルスペースとして活用。

これらの提案は、台湾の実践例と丹波市の地域特性を組み合わせたものであり、具体的な場所の選定には至っていないものの、台湾と日本の学生による協議を通じて、地域づくりに共通する課題とその可能性を見出したことは、大きな意義を持つと考えている。

【定住班の感想】

今回、台湾と日本の双方の大学による交流と討論を通じて得られた経験は、非常に有意義な時間であったと言える。

また、今回の活動にあたり多大な支援をいただいた東海大学、関西学院大学、朝陽科技大学、そして地域住民の方々に、この場を借りて心より感謝を申し上げたい。

特に今回の活動では、日本語、中国語、英語という異なる言語を駆使しながらのチームワークとなり翻訳機器も加えた中でのフィールドワークや発表会はどうなることかと最初は思ったが、様々な活動を通してお互いの距離も縮まることが出来たおかげで、どうにか一つのテーマの発表を無事完成させることができ、大きな達成感を得ることが出来たと感じる。

また、実際の討論においてはチームワークをする中での「横のつながり」の結束を情報交換の中で実体験として感じるとともに、今後の地域のまちづくりにおいては、いわゆるこのような「共同活動の場」を提供することが発展につながるのではないかと強く感じた。

これは、実際に互いの言語が違う学生同士の討論においても「人と人とのつながり」の大切さが挙がったように、新規で起業をするにおいても一人の力ではできないことも複数人いればできるという協働の考え方は、とても大事な考え方だと実感した。

この活動は約4日間と長い時間とは言えないものだったが、その中でも実際に丹波市柏原の地域住民や中高生との座談会を行ったり、まちおこし協力隊の方と一緒に意見交換をしたり、街のフィールドワークをすることで、多くの貴重な情報を得ることが出来た。

また、台湾と日本という異なる背景を持つ学生たちが意見を交わすことで、様々な視点

から物事を捉えることが出来た点も、本活動の大きな成果の一つだと言えるだろう。

今後も、この貴重な経験を生かし、よりよい協働のあり方やまちづくりの仕組みについて継続的に考え、実践につなげていきたいと思う。

3-3. 「交流班」の取り組み

今回の活動における主な目標は、地域に眠る資源を再発見し、それらを活性化することを通じて、住民が地元へ愛着を持てるようにすることであった。私たちはこの過程で、これまで十分に活用されてこなかった2つの地域資源に着目した。

埋もれた資源その一：「小さな本棚」

この本棚は、柏原歴史民俗資料館および年輪の里の2箇所に設置している。柏原歴史民俗資料館には柏原の歴史に関する書籍が並び、年輪の里にはDIYや木材に関する専門書が置かれている。いずれも地元の資源としての価値は高いものの、住民の多くがその存在を知らず、利用者もほとんどいないのが現状である。

埋もれた資源その二：「一番館」

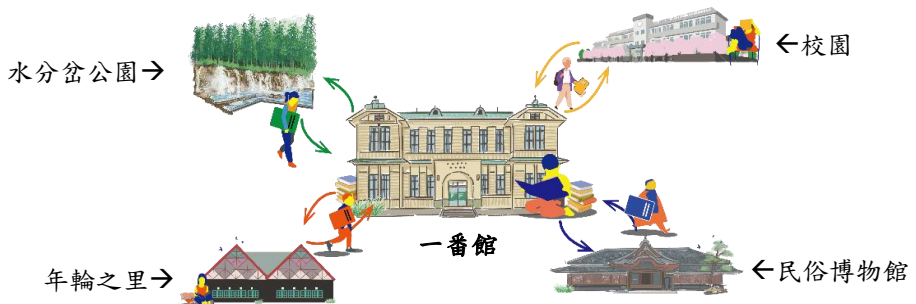


図1 一番館とその周囲の資源

一番館は1935年に建てられた元・柏原支所の建物であり、歴史的価値の高い建築物である。その周辺には木根橋や大葉櫨などの景観もあり、柏原の風景を象徴する場所でもある。さらに、柏原駅からのアクセスも良好で、地理的にも魅力的な立地にある。しかし、政府

機関としての役割を終えた後は、活用されことなく放置されている。

これらの資源が活用されていない現状を非常に残念に感じた私たちは【本を通じて、知識と人、人と人をつなぐ】という仕組みを創り出そうと考えた。

私たちはまず、各地に点在する「小さな本棚」の本を誰でも自由に借りられる仕組みを整えることを計画した。そして、それぞれの場所にある本の一部を「一番館」に集め、一番館でも貸出が可能な体制を構築することを目指している。この方法によって、一番館が柏原地域の知識と情報の集積拠点となることを意図している。

一番館に集められた本を通じて、訪問者は柏原がどのような地域であるかを知ることができるようになる。また、多様な本が訪問者の関心を引き起こし、「他の場所にも行って見たい」と思わせる導線としても機能する。たとえば、美しい陣屋の風景は民俗資料館でしか味わえず、木材の香りや手触りは年輪の里でしか体験できない。さらに、水辺の生物の生態や涼しい環境は水分岐公園でしか楽しめないものである。

このように、本と人の流動を生み出すことで、「小さな本棚」と「一番館」の両方を活性化することができると考えている。

また、交流班では、書籍を活用した地域活性化の先行事例にも着目した。例えば、長野県小布施町では町立図書館を中心に「全町図書館」構想を推進しており、住民が自宅や店舗に本棚を設置し、自由に本を貸し出す仕組みが整備されている。このような事例を参考に、例えば柏原に既存の本棚に加え、スーパーにはレシピ本、医療センターには健康関連の本を置くなど、多様な本棚を設置できる可能性を考えた。

この提案における重要なポイントは「書籍の流通」である。住民が一番館に繰り返し訪れるためには、本を頻繁に入れ替え、毎日異なる本が並んでいる状態を維持する必要がある。こうした仕組みによって、住民にとって本棚が日常的に訪れる習慣の一部となるような環境づくりの形成を目指している。

【交流班の最終提案】

上述した提案を考える際、関西学院大学主催の事前調査座談会を通じて柏原の住民と交

流する中で、住民の多くに「本を借りる」習慣がほとんどないことが明らかになった。現代ではもともと読書をする人が減少傾向にある上、柏原には便利に利用できる図書館がなく、唯一の図書館も蔵書数が十分とは言えない。そのため、他の都市と比べても「本を借りる」という行動が柏原では特に定着していない現状がある。

単に書籍を集める場所を作るだけでは、読む人がいなければ意味がない。そこで、普段本に親しみのない人にも関心を持ってもらえるよう、以下の2つの対策を提案した：

①「本」自体に工夫を加える

本にPOPを付けたり、表紙を外側に向けて並べたりすることで、人々の目に留まりやすくなるようにする。交流班では他の事例も参考にした。例えば、本の表紙を隠し、本文の一節だけを見せて興味を引く手法などである。また、読者が自由に感想を共有できるノートを設置することで、人と本との対話を促進したいと考えている。



図2 書籍にPOPを追加



図3 本の表紙を外側に並べる

②「本を置く以外の環境づくり」にも工夫を加える

一番館の内外の環境を再設計し、一番館を単なる図書館にとどまらない、多機能な地域拠点にすることを目指している。具体的には、一番館の裏手にある空き地や隣接する観光情報センターなどのスペースを活用し、柏原に不足している公共施設を設置する提案である。例えば、簡易医療相談センター、子どもの遊び場、カフェなどが挙げられる。また、各種イベントを開催することで、読書以外の目的で訪れる人々にも一番館を身近に感じて

もらえる環境を作る。

③一番館を多機能な施設に

これらの公共施設を一番館に設置することで、図書館以上の役割を果たし、多くの人を惹きつける施設にすることを目指している。特に高齢者と子どもを対象に以下の構想を提案した：

- 高齢者向けの憩いの場：一番館を高齢者がリラックスし、新しいことを学び、他者と交流できる場所にする。具体的には、高齢者向けの研修コースを開催し、日々の生活に楽しみと刺激をもたらす機会を提供する。

また、以下のようなアイデアもある：

- 養老食堂：住民が食事を楽しめる食堂を設置し、イベント会場としても活用できる。
- 高齢者の交流イベント：レクリエーションや趣味活動などを通じて、高齢者同士はもちろんのこと、若年層との世代間交流を促進する。
- 癒しの庭園：園芸療法の導入により、高齢者の身体機能低下や認知障害、抑うつ状態を軽減する効果を期待する。



図4 養老食堂



図5 癒しの庭園



図6 高齢者の交流イベント

- 簡易医療室：一番館内に診療スペースを設け、週に1度、駐在医師が診療サービスを提供する。医師不在時には、このスペースを一般的な医療室として利用し、傷の処置や消毒など簡単な医療ケアを行う。



図6 簡易医療室のイメージ図

- 児童図書館：

一番館内に子ども専用の図書館を設置し、異なる年齢層が読書を楽しめる空間を提供する。保護者が読書を楽しむ間に、子どもは児童図書館で遊ぶことができるた

め、大人と子どもが共に安心して読書が出来る環境になっている。さらに、児童図書館は子どもたちに読書習慣を身につけさせる役割を果たす。



図7 児童図書館の空間設計図



図8 児童図書館のイメージ図

これらの施設を通じて、一番館を老若男女問わず楽しめる地域センターに変えることを目指している。異なる世代の住民がそれぞれの関心に合った活動を見つけ、互いに交流を

深められるような環境づくりを重視している。

これらの対策を通じて、一番館周辺に書籍貸出を中心とした魅力的な文化・交流環境を創出し、一番館および地域に点在する「小さな書架」を活性化させることで、住民に地域への帰属感と愛着を育んでもらうという目標が達成できると信じている。

しかし、柏原市資産運用班の市職員へのインタビューによれば、一番館が現在十分に利用されていない主な要因として「資金不足」と「人手不足」が指摘されている。住民の力だけでは改修費用や年間400万円の維持費を賄えず、運営に携わる人材の確保も喫緊の課題である。提案の実現可能性を高めるためには、持続可能な運営体制の構築と具体的な場や仕組みの設計が不可欠である。

【交流班の感想】

今回の交流活動に参加できたことを、大変光栄に思う。東海大学、朝陽科技大学、関西学院大学の先生方や学生の皆さま、そして地元住民の皆さまの温かいご支援とご協力に、心より感謝申し上げます。わずか数日間という短い期間ではあったが、非常に多くの学びと貴重な経験を得ることができた。

交流活動が始まる前、建築設計や都市計画といった専門分野に初めて触れること、そして東海大学からの参加者が少なく、一人ひとりが翻訳作業を独自に担当する必要があったため、「果たして自分にその役割が果たせるのか」という不安を抱えていた。しかし、珠雪先生や東海大学の仲間たち、さらに朝陽科技大学や関西学院大学の先生方・学生の皆さまからの励ましと支援に支えられ、自信を持って挑戦することができた。

活動中は、積極的に話題を提供し、グループ内の雰囲気を和やかにするよう努めた。僅か4日間連続で即時通訳を担当することは非常に挑戦的であったが、中国語、日本語、英語を駆使し、双方の意図をできる限り正確に伝えるようにした。翻訳の際には、台湾と日本の思考様式の違いに配慮し、授業で学んだ日本文化の知識を活かして、言葉の選び方に慎重さを加え、「空気を読む」姿勢を常に意識した。

また、文化的背景や専門分野（例：景観都市設計学科と建築学科）の違いから生じる意見のすれ違いに対しても、辛抱強く説明を重ね、相互理解のために努めた。この経験を通

じて、異文化間の橋渡しを担うことの責任と、その役割の重要性を深く実感することができた。

中でも特に印象に残っているのは、市職員とのインタビューである。法律や建築に関する専門用語が数多く飛び交う中、正確な意味を伝えるため、話を聞きながら即座に資料を参照する必要がある、大変な緊張感とともに高い集中力が求められた。しかしその過程は非常に刺激的であり、新たな知識を吸収するとともに、即時対応力を鍛える貴重な機会となった。

今回の交流活動は、私の専門的知識や語学力を高めるだけでなく、文化交流の価値と意義を深く理解するきっかけとなった。数々の学びと気づきを得ることができ、自分の成長を実感した。今後もこの経験を学術研究や実務に活かし、異なる文化をつなぐ架け橋としての役割を果たしていきたい。

4. 終わりに

今回のプロジェクトに関しては、まずは台湾と日本の双方の学生におけるコミュニケーションという部分において言語の壁という問題があり、これらの部分においては多くの困難もあったがチームワークにおける課外活動を通して、お互いを分かり合うきっかけになったと思う。また、丹波市柏原地区におけるまちづくりにおいてはそれぞれカテゴリー分けをして分野に応じた視点から問題点や解決策を導いた試みは非常に大きな収穫であったと言える。また、最終発表会においては各チームがそれぞれの問題点を検証し、新たな解決策を提案したが、それぞれやり方や方法が異なっており、その部分において幅広い提案が出来たことは台湾と日本の双方の学生が共同したことに意味があったように感じる。また、この地域のまちづくりという視点から問題を考える時に、台湾と日本における共通点や違う部分などがお互いに発表をまとめる中で理解し合えたことも今後の活動をする中で、それらの経験を糧にしていきたいと思う。

この活動自体が示しているように、今後の地域活性化の鍵を握っているのはコミュニケーションであり、私たちが経験したような違った背景を持った人々が討論する場を設けることで、新たな発見や解決策を協働して導き出すことが今後の課題解決にとって必要な部

分であり、この学びを様々な局面で活用することによって次の世代にこれらの考えを共有して、問題可決に取り組んでいきたい。

(青木利憲 あおき かずのり 東海大学日本語言文化學系)

(張庭瑜 ちょう ていゆ 東海大学日本語言文化學系)

(張仲霆 ちょう ちゅうてい 清華大学歴史研究所)